昭和十二年度

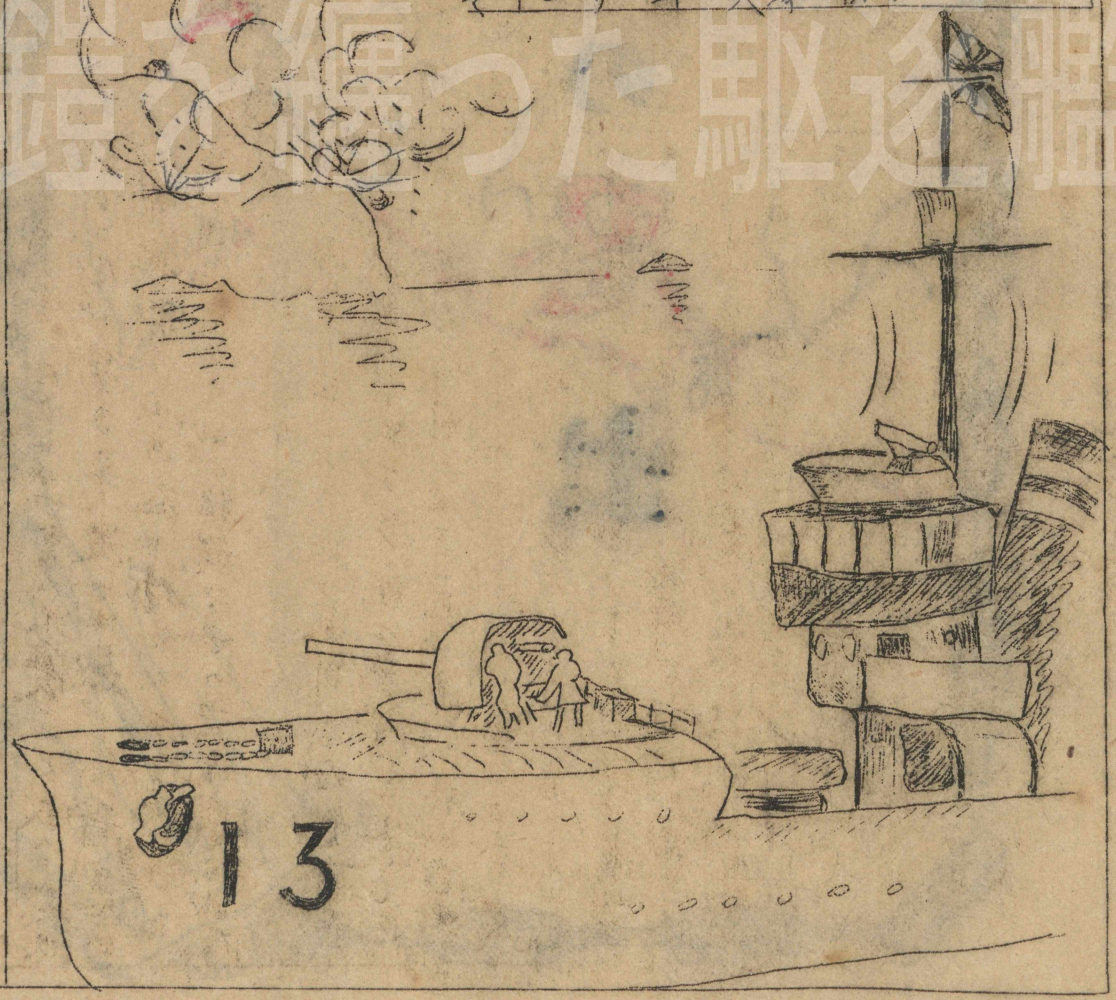
早苗の思出

鎖を纏った敵逐艦

早苗の思出に題す

同文同種の日支兩民族がどうして相戰はねばならぬのだろうか、武と言ふ字は止と戈の二字から出來てゐる即ち戈を止めると言ふ意味だろうと言ふ意味から言つても戰は須らく禍を転じて福とするものでなければならぬ今度の事変も支那を徹底的に懲膺すると共に日支間に横たはる結べての葛藤軋轢を清算して明朗なる日支兩国の共存共榮に導く事が最も肝要なりと信ずる我々軍職にある者として第一線の任務を解かれて戰地を去らんとする今は誠に我名ひなるが直接間接の孝養をも兼ね今度の事変に最初より參加する事が出來たのは誠に武運の至に過ぎるものがあるとして申すべく本事変が日支永久親善の礎となる事を願ふと共に海陸全の第一線に活躍せられる戰友諸兄の益々武運長久を祈るものである

（終）



鐵道繪つた駅逓

八、「母」

讀人不識

秋が訪れる度に私は故郷の農家の彼の忙しさを想ひ出す

田刈り、稲こき、穫入と朝は人より早く暗い内に夕は星を載き早や寝床まつた眞暗な村の道を我家に急ぐ兄や姉と忍ぶ様にコツソリと歸つた事幾度そ昼の救手に又子供の守に疲れた弱い身体の母は必ず我等の帰りを待ち迎へるのもいとはず待て居られた。

入国以来農事に離れた私は秋深くなるにつけ往時の有様が不識々々の間思ひ出される。

幼き頃遊び半分に田畦に出て私は人知れず親の恩の廣大なるを知る

て家業に手傳ひし頃は母も未だ〳〵達者で一人前に働き一腕百盛りの私に善く叱言を言つたりしかつたり、又優しく教へて呉れたものだが寄る年波では無く不圖思ひ出し神経痛のため私の物心のつく頃には再び野良に出て働く壯健な母の姿は見られなくなつた。

今より考へると早くより夫に死別し母手一つで幼き兄弟を育て上げ身体に無理を来した事が大きな原因であると私は思ふ。私が海軍に入つてより身体が悪いと言つて寝ても又大阪の病院に親戚の家より通つてゐても私が休暇に歸る事を知らずと自分では無理をしてゐても床を離れ、又帰つても母が家に居なければ寂しがるだろうと家に歸り艦へ歸つてからも母の身を心配せぬ様御上の務をおろそかにせぬ様、強ひて元気を出して立振るまふ母の姿母の日頃の病状を知る

鎮守府横須賀海軍病院

後で悪い事を言つた　すまないと思つても　其の爲が未だ病に倒れた事無く再度の負
「母の意地」謝る事は出来ない後の祭だ　傷にも障ぐ所で急所を外れ　是皆母の
未だく若い修養が足りないとつくく感ず　神佛の信仰と加護に外ならないと私は信
る。今度歸つたら優しい言葉で喜ばしてやじて居る。
ろうと思つて帰つても駄目だ。
つ、以前の失敗を繰返す、幼い時寺屋に私の人生は闇となるだろう、母居るな
式教育月それも友達にいぢめられたと言ふ母はれば　こそ母に心配を掛けまいと人に負けま
ろくく教育も受けず文字通りの無学で　いと一日も早く立派な出世を母の生きて
ある。其の代り記憶力の強い事は人一倍　居る中に見せたいものと毎日是を念じ働
忙しい農家むずかしい種々の仕事に母の記憶　く私の姿である
より出ずる言葉は皆多年の経験と記憶力　母の愛は廣大であり母の愛情は永久
より出て　経験を父西七とする農家の　不変である
住宇引となり教育を受けた兄嫁等は　（完）
足元にも寄りつけない、母は又非常な神佛
の崇拝者であり信心家である如何なる
難事に遭ともきつと国では母が私の身
を神佛に念じ常に加護して居て呉れる
と思ふと如何なる苦難に遭ふも恐ろし
き事なき強き心念を持つて居る。

厦門の断片

衛藤男

風薫る常夏の馬公を後に後半期の警備地へ！無敵を誇る艦隊の三、砲烟渦風を呼び
さして舳をしぶる青山事件後の沙頭に砲活　怒濤はたけり山をなす
する何か心が重く警備地の不気味を味ふ　風雨難今と振ひ立ち
約一週間不気味な警備を終り厦門に向ふ夏　砲列連ね進撃す
の航海は静かで美しい迎ひば日出の光り！　二海神怒加はりて
今にも落ちて来る様な星を迎ぶ静かなる　暴風荒し南海洋
航海を続けて暁の厦門に入港する　十四層落ちる砲撃に
海は未だ寝てゐるかの様に波を流した如く　地軸は裂けし砲撃
ふい凪のうろこ波が美しい波加船側をたい　出陣歌（ストラリユー）
てゐる　朝霧に包まれて見えるコンスタ一、椰子の木影の水澄みて
島も日光を示唆し　我等を迎へる様に次第　彩雲炎と燃へる下
に其の姿を見せる　隠る飛沫を身に浴びし
我等の警備地で自分の一番好きな之　厦門　海国男子は微笑みぬ
岩壁の美しい風景に私は心引ずられし見入　二十ノットと極して打伏せし
る朝霧に見える厦門の夕闇に包まれた　嗚呼幾年の血と涙
厦門も又其の詩情をそぐのに一役と思ふ　父で立ちに必勝の
さを見せてゐる　（終）　早商の意気を吾見ずや
日光巌よりも漢文の詩として見る　（筆者不詳）

我が艦隊（南支岸上を撫ふ）　川口一水

二、怒濤は荒れ山をなす
見よ敵陣を蹂躙す
旭日赤き戦斗旗
四、必勝の士気敵を考ず
桜に匂ふ歓喜
死しては国の礎なる
我艦隊の猛勇士　福場二水

三、南の海の夢破る
逆巻く怒濤雄叫びの
行けよ我友秋は来ぬ
嗚呼秋は来ぬ行け友よ
四、ボルネオの森な月が出た
闇の張りの降りる頃
勝利に酔ひし鬼ストリユー
流す熱涙吾見ずや　RN生

廣東の思ひ出

西村紀佐久、中を小舟にセンチな支那音樂絃の音にあはせ

今宵片割月が夢の如く積雲の中に浮ひ、こして現ふ世の聲は靜かる舟の間を巧に縫つ朦朧として遠なる支那大陸は世気味なく美しき聲を貴り幼な子のいとも上手に落着きの中にある舷側に砕くる波は銀波オールを持つて小舟を操り老婆かしと物を賣となつて戯れ靜かに漕ぎ行く晩秋の宵る半裸の男舟の上にあぐらを組んで樂器を慌ひ出は遠く或は近く頭に浮ぶる事ありし其である彼等一種野蛮的な生活の中に音南支警備靜かに眺目すれば結べてか懷しく樂を好むのは賴母しい。

く廻り聯想は聯想を生み盡くるを知らず高く從聳ゆる白亜のビルを背景に半裸の人の船を漕ぐ異なる對象都市廣東三ヶ月に亘る警備の思ひ出は我等に最も深い印象を持つ金髪碧眼婦人の色鮮やかに緑樹の下河岸の通りを闊歩し色黒く鋭く輝く眼の中に一種の優雅を持つ印度ポリ其米佛蘭のすまし顔の水兵達は美しく粗暴を彩る珠江の濁水に幾萬と知れず大河を埋る支那水上生活者の辭、行き交ふ異格好なる運貨船衣ともなれば街の灯の反映は一大不夜城をなす真

北支に日支衝突起る廣東市民の物質的精神的壓迫に耐へかねて引揚げる邦人の姿で固めた財産を遺棄して歸る姿は今も尚淋しく胸に響く。

夜天下に體を練り又頑是ない祖国の兒童と戯れし小學校の校舎運動場今は主なき淋しい思ひ出は南支邦をめぐる國の此處彼處にも殘されある感じがする

我に取りて確か第一年から意義深き警備であり記念すべき思ひの數々は一生涯を通じて忘れ得ぬものとなつて浮んで来

（終）

鎮魂維持国際連盟

○完全に一汗　　早苗明光

○夜の明けるのもいやに思つた　暑明光

昨夜の關係もまだ復雜でなかつた或日公用天幕の蔭から差し込む朝日、朝日と言へば何を終つて上陸桟橋まで帰つて来たがまだ気持善く感ずるがそうでない、猛烈な炎陸発迄は四十分余りもあるので附近を散歩してゐた時に何時見ても愛嬌のある印度ポリ逸自分に話しかけた　さあ困つたべうべう　は居所に居しむ　天幕は二重に張つてあるが喋つたが全然不了解だボートタイム　チャパンレイープと言ふ事が少し分つて、やつと判断が出来た「日本の海軍さん軍艦に帰るのは何時かね」又「軍艦からボートが迎へに来るのかね」と尋ねたのでしようなづいて返答した　暫く立つて又待合所から置き忘れた棒な庭球ボールを持つて来て又べうべうやるのだ　もう断だ「ノー」と一言返したので彼も了解した此のボールは貴艦の誰かが忘れたのではありませんか」と判したのだ　英語の知識の無い自分は完全に一汗出した

（終）

その下の甲板リノリュームは勿論軟かくなつてゐる昼休みも一眠りもうつかり甲板で眠つて居れぬ此の熱さは幾日続いたか夜の明けるのかいやであつた

笑話　高雄在泊一日　一條豊坊

○○機曹に面會人が来た居住区に○○機曹食卓に水滴有るを見て曰く「おい　マッチ（内証マッチ）を持来れ」　口三機「イイ」と答へた

面會人「よろしい　マッチはありません」とポケットから「マッチ」を取出した、　口三機「マッチ」を持来り水滴を取り去る様を見て面會人　ひそひそと海軍用語に大笑ひ

（終）

武運を祈る監視隊かな　　丁生

上海で武勲を立てる戦友の

艦名解説 第二次世界大戦の日本艦艇

○凱旋に當りて　　三輪一水

此の度二ヶ年の重大なる警備の大任を果して凱旋する日を如何ばかり待つて居た事であろう、然るに病魔には勝得ず黄泉と茅出度く祖国に凱旋する事になつた

旅立ちし兄の胸中や如何ばかりであつた

回顧すれば北海事件或は汕頭事件と其の度に共に第一線に立つて民留民の保護に當り赫々たる武功を立てたのである　此處に於て諸兄よ吾々の此の茅出度き凱旋の蔭に尊き犠牲者の有る事を忘れてはならぬ、、　死なば諸共と固く誓つて故国を後に警備地に向ひ灼熱の廣東に汕頭にと共に行を流して警備の大任に當り不幸にも病魔に冒され晴れの凱旋を待たず果無くも黄泉の旅に立つた故宮本敬十林三曹の事を！　生前常に輝ゆる如き熱誠を以て職に當り又吾々の先輩として兄の如き慈愛を以て我を導れて兄の熱意は今猶眼前にある如き心地がする

病床に臥するや人一倍責任感の強い兄は一言一動は常に看護に當つて居た吾々の胸を強く打つものがあつた、この言を聞く度に我々は

兄の全快の速ならんことを祈り共に元気で凱旋に當りて故宮本三曹の冥福を祈ろう　（完）

水谷三郎

A

我が勇武なる艦艇

海やさしく見ゆれども　見えよ艦艇きたれよ　C

知るものなき大初雄の　知れよ正義のその我

固き心に練磨して　飛んで散り行く無線台

心して見よその力　砕けて転ぶ砲台に

B　　撃ちて沈し砲けり

激風波浪何のその

風は切り波又割れて

行手さへぎるものはなし

さへぎるものがあるとても

負して止まぬ覚悟あり

（完）

○或夜の感激

T生

内地では朝夕殊更に寒さ身に沁みる頃だろう。時雨にさそわれて、カタ〳〵とメッタルを降りうに此処警備はまだ蒸暑いハンドレールに肘る足音静かに導く眼を開いて見れば當番が
を突いて空を仰げば銀砂を振り撒いた様に大小無数の星が明滅してゐる下弦の月が物憂く輝いてゐる其の宇宙を星座の様に畫間眺める事も出来るし植物も一面にうと頭を擡げようとする矢先を制して彼は靜
塗り潰されてくつきりとした無名の島が悪魔の蹲ってたのかと思はせる様に迫切つてゐる。
一日の終べてを清算する寝に就く前の一とき何となく心にゆとりが出来て来る。艦の内はいつそり
と靜かだつて腕を拳げて薄明に文字盤を見れば十一時眠気を紛はす爲か當番の刈コトと半靴の音が幽かに傳はつて来る。
「さあ明日の戦斗に備へるべく寝ようと呟いたとき……流星が……人魂の様な流星が
きらいて向立山の向へ落ちた。ゾッと戦慄を覚ひ
殘いカサコソとシッメルを降ってもぬぎ
込んだ。どうも暑い安らかに寝んゝり寝ぬ

意識に毛布を跳ね除けたと眠を通ろうとした
○○○之當用意いウーンと怒言葉が交された私は無
彼は私の毛布をゆっくりとはき取った「オイ」と言は
かに私に体に毛布を掛けて呉れた。彼は私が
眠つてゐると思つたらしい「オイ」と叫んとした
言葉が咽喉に詰つた打ち上げた歩哨の場の無い様に……熱い戦友の情にかけられ
た毛布も蒸暑くても除けられもせず心つと
狸寝入をした風祭を引かない様にと気遣つ
て草臥れて居るだろう彼は私につくして呉れ
た其して彼は活潑にカタ〳〵とメッタルを降つた
一瞬チーンと熱い感謝が胸を突いた四面は一
面レーンとしてゐる。誰だつたのだろうか薄暗
い光線を背に受けて居た彼の顔は不明だつ
た。どうも暑い安らかに寝んゝり寝ぬ
ゆ〳〵それでは

彼の純真な親切心に背く様だ　そうだ此の恩此の強い感激を胸底深く銘んで置かう、

W生

○○○砲撃の思ひ出

今から敵陣地へ砲撃に向ふとの令にて一同異様に目を閉ぢた、バサッ〳〵舷側を波が同じ様の紫腹と共に踊らんばかりに喜び勇んだ音と音律で叩いて居る、彼方は月が冴えいよく戰斗喇叭が勇ましく喧響き檣頭高く戰斗旗は飜へった　時あたかも九月十二日

打ち方始めし、初弾命中　又命中　敵山砲の飛ぶのをまのあたりに見へる、見て居た者誰も彼も手を打って喜ばざるを得なかった、今更ながら命中率の良さに警漢したのである　やがて幾度かの砲撃の後「陸戰隊用意」の号令が艦内に響き渡った　今度こそは敵の陣地を占領するのだ！千人針と鉄兜に身を固め銃剣を眺め幾人笑くかだめしてやろう？

すっかり弾丸を配給せられいよく出発となった　初めて敵前に行く我々は一種異様の感に打たれた　而し教訓にある如く教練は戰斗と思へ　戰艦に乗ては教練思へ　であるガッタリ」を離した時艦上から口々にガッタリ」の聲援を浴せられた　が其の時最早陸戰教練に行くかの様に落着き持つた気持になって居た

〈終〉

われらの背後に耳も立て祈願を籠めて静もれる大なる祖国の在るのぎり、我等の使命が永遠に汝の魂、腹背を踏みゆくことであるかぎり、、、、、、、、戰ひ抜くで隊長よ。

トロール船来る度毎に思ふたな故郷の便りのあるや無しやと

K生

警備のひとゝき

丁生

一、立イ、トンカーエー
荒水の上を辷る黄な船
今日も赤い陽が落ちた
南支の雲の山の彼に

二、青い街路樹生きて来た
悠々たりと其の路を
太く黒いズボンが歩む
紫色の煙を残したパイプと共に

三、ソヨと涼しい風が吹く
焼けつく暑さを忘れよと
何此位警備の猛者だ
故郷にゃ白髪の母かまつ、

南支の思い出

無名

一、月は流れゆく日生霜去りし警備を顧みれば
炎天の南支にはたゞた極寒の北支に
逆巻く波を我が友とし難難辛苦も
今は只一つの夢と去りて

二、思出多き過去となりぬ
思い起せば昭和十年十一月
港舞鶴を後にして今日迄去ぎし任務の数々も
よしや母に知らず終るとも我帝国の基をば
萬年迄も固むるその一端となりぬべし

三、いざさらば南支の月よはたまたあの濁れよ
荒涼の山々も今は只懐しき思い出として
我等の悩裏に深く残るならん

南国の情緒を偲ぶ

五班 M生

砲煙にまびれて黒き笑顔哉　同人
常夏の香も高き龍舌蘭　同人
牛いら妲(タマ)擂(ドル)球でハリ〳〵手があがり　静海
戦場や砲聲絶へて蛍の声　無名の士

戦ひのあいまに

戦ひのあいまに谷川の清き流にあかおとす哉
暑き夜を眠れぬまに母板打出て見れば月で澄けり
遠近の水牛のいと珍しき一度見せたや女と母
花咲けど散りにし戦友の昨日今日見るもの淋し海の
夕暮　以上　U生

艦名縮つた駆逐艦

早苗の思い出　　二熊礼子

一、任事には全力を集中
一、精進
一、早苗第一
一、規則を守れ
一、健康に注意

一、艦長訓示
一、元気に愉快に
一、健康第一
先任将校訓示
分隊長訓示
一、職責の尊重
一、礼儀を正しくせよ

配役

艦長	海軍機関兵曹長	谷林徳治
隊機関長	海軍兵曹長	西野富一
先任将校	海軍少佐	吉井五郎
軍医長	海軍機関少佐	河野不二
機関長	海軍大尉	川陽一郎
砲術長	海軍機関中尉	宮原誠
航海長(前)	海軍中尉	平尾崎隆
航海長(現)	海軍少尉	田中武克
掌機長	海軍少尉	大関哲
掌砲長	海軍機関特務尉	清水滋
	海軍兵曹長	渡里季蹊

注　二熊礼子

掌水雷長　海軍兵曹長　西野富一

士官室名入短文

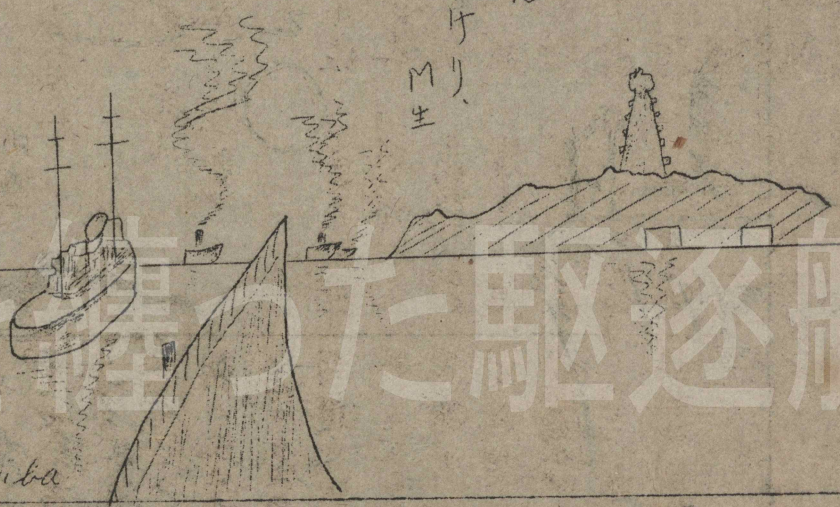
眞に水の尊さ有難さを知る者は何と言つても海上生活者であろう宮原の誠より谷林に徳治々々と流れ出る小川陽一郎に早苗第一と流れ溢るゝ如き清水滋津にも駆逐艦生活には河野不二由勝であつた朝に太陽を迎へ西野富一に沈む夕日を眺めた暑き廣東に將又七月七日以来の事変に湾港封鎖の哨戒直に職責を尊重し規則を守り礼儀を正しくし健康に注意して尾崎隆に身心を練り元気旺盛に心は田中武克に身は大関哲其の性の如くに元気に愉快に任事に全力を集中して健康第一に精神をモットーに一年一日の如く何事にも吉井五郎と困苦欠乏に耐へ永き南支警備湾港封鎖の重任を果して今台湾海峡を渡里季蹊として芽出度く内地へ凱旋せんとするに當り尚此の心の永久に渡里季蹊續き平かならん事を希望す

（一九）

天突きを想ひ出さす
四維星塔

バイアスを
たての中にて
右砲戰

四維星塔
煙しずかに
のぼりけり、
M生



艦を縛った駆逐艦

橋上に揚げて嬉しい同清代
○○生

南支那封鎖は固し五水戰
丁生

誠心の熱でとけたり
厚い問題
無名氏

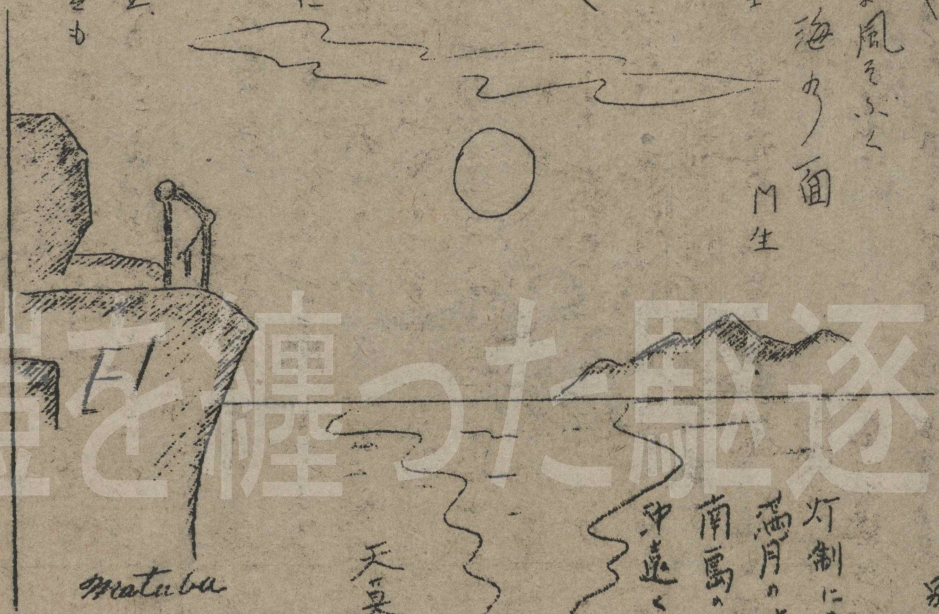
満月や
そよ風そぶく
海の面
M生

水底に月の光や
景をさし　無名の士

鳥なきて
今宵静かに風そよぐ
島かげうつし
月は冴へけり
無名

流れ雲
南支警備の月の夜に
そぞろ思はん
ふるさとは何
二斬生

濁水にながなる山の数をも
たゞはげのみで
歌にもならず　無名



幾年か異域の空に生を得し
別離の想そぞろ一身にしむ
風来坊

灯制に月のあかりで文をよみ　T・i生
満月の清く輝く海の原　無名の士
南島の想出深し秋の夜　T・i生
沖遠く煙を見るや待機直　T・i生

天幕越に見る月
「トンカーエール」　無名の士

南京の朝昼晩と
絶攻撃
無名氏

艦名の載った駆逐艦

川和漫文

亂来方

事変勃発以来連日の如く無聊の日々が　目標へと……　為かの元気愈々旺盛突進
続く我々南支封鎖任務　思い出しても身の及び難き　あゝ然　自暴つく許りの断崖絶壁進
のごとく○○○陸戦隊　思い出のまゝ漫文　むに止なく引くに術なく勇士も一寸進退此
一筆　認めんかな　……

「陸戦隊起し」緊張した富春の聲が一年乃至を無用の長物だ特に我々の如き軽装銃弾丸
うつ　かばとはね起る我々勇士前夜の緊張　も整ち得ず背をば食む
振りに各自の眠り不足にも見へる

愈々出発波高く勇ましく進むカッター　所に集まるの有様　この所隨身兵器も一寸
ザンブ〳〵いよ〳〵陸だ海辺に立つ白亜の殿　次矣の中に没して　しまうも哀れさをそゝる
堂　悠然と瞬視する人影五、六、十人　思い出や鶏の丸焼、芋の砂焼」
すは敵兵襲なれと酣睡と付く勇士あゝ　愈々夜半の寒さは我々の身邊をおそう
されど麻塵酣睡の四文字　我等の眼を　炉火を中央に寝る勇士昼の疲れにぐったり
射る　「やル整手つた　辞れるは瀬で情だで全く」と眠る

折からの秋晴れをついて山頂を極むくつきと浮　「焼く涙も時こそ秋で夜半のつめたさ」
ぶ連島、そして浮ぶ本船　小雨降りて我々早朝に目醒め指揮官の
「山頂を極めてうれし本船を見つ」　先発隊出発用意の聲耳朶にこだます
食事も終り紀念撮影もうれしく下山の途に武装も重かしく愈々歸途に就く勇士の面
つく　農の小村落嬉々として遊ぶ放牧　刈り取り合や生気満々たるを見る。

佐藤維文藏

「雨降りて早目曇るか武者振ひ」
遂に越山昨日の上陸地点に着くと已に他人が
来てゐる新しい艦上の人となる。（完）

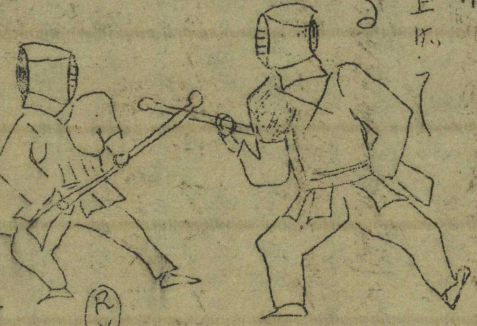
誠一

吉松

最友が昨日は○○攻撃
今日は○○爆撃と耳にし聞く毎に
心は逸たけたれども まにならぬは主の
のならひ
今の自分の務を思ふ時あの五筒條の歌に
ある「務めは種々に変れども尽す誠は
只一つ」又思ひ出す別れ際の去られ
し母の言の葉を
どこでつくすもお国のため 誠一途上奮
（完）

十合二郎

銃剣術
五年一張上がって
勝となる
RN生



防共の風に
風引く
赤い鬼
（伊太利）

南支那季節の風に吹高し
強者も金詰攻に閉口し
若川で自分の衣類を洗濯し
南支那霜月半ば水を浴び

丁生
〃
〃

鎧を纏った駆逐艦

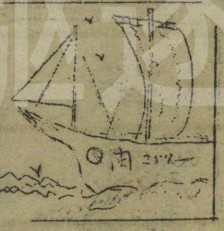
早苗の歌　紀佐久

一、怒濤踏み波浪を蹴つて高かましく
南支の海を馳け行くは
海の隼駆逐艦　あゝ吾等が
吾等が乗れる早苗よ！

二、雨よ降れ颱風よ吹け何のその
南支は常に我守り
任務は重し南支那　あゝ南支は
南支は常に我にあり

三、奔馳する天馬の如く今日も又
西に東に疾駆する
海の丈夫我が早苗　あゝ凄々し
凄々し我等が軽快艇
四、妖雲が空を震へと我除りん
我が日の本の正義もて
目覚め友邦幾億よ　あゝ輝く
輝く我等が海の華
五、東洋の平和のために全力を
つくす誠言備の重大は

忍苦と汗の努力よ！　あゝ偉なり
偉なり我等のあゝ早苗　（見）



「ジヤンク抑留」

一、どちらから捕ふべきやと迷ふなり
晴れたる空にジヤンク都る　紀佐久

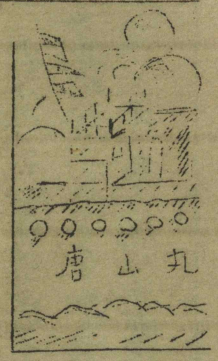
一、類繁に汕頭港に出入する
ユニオンジヤンク何運ぶらん　山志匁

一、ジヤンク船捕へて見ればすを合はし
波流して命迷ふなり　紀佐久

一、扇影にジヤンク見るや鋪まく
一、ジヤンク狩追付きや逃る封鎖線。　○生

T i 生

鎧を纏つた駆逐艦



廣東引揚

（一二、八、一七）

避難民きつと腸つまと目に浮

水谷二等

邦人の引揚終り武者振ひ

凸山生

反撃のそなへかためて雨をほる

お寫眞と共に珠江をくだる

山志多

引揚さんも知らで月れの

あゆく沙面慰しに居るかも

風東坊

お寫眞の御後盾の力かぎりなし

黄埔も虎門も我を待たざり

山志多

濁流や想出多き廣東のなか

丁生

事も無く虎門をすぎて居留民

歡喜の聲に萬歳唱ふ

山志多

トンガーを金にする者哀れなり

無名

ジャパン船去りて歸海不況なり

無名

北月の跡で暑さを知る昼やすみ

無名

エキゾチックな唄声に當直時も早く行く

無名

印度ぢり孫者を迎へてコンニチハ

凸山生

煙草盆船内新聞花が咲く

凸山生

幾年か異域の客に生を得し

別離の想そゝろ身にしむ

風東坊

鎧を纏った駆逐艦

「○○基地」

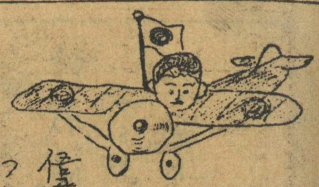
空爆の
偉勲を立てし荒鷲の
つばさ休めし基地を守
らん　山志多

基地は今測量班がせっせと
忠水のそばに假すまいする
山志多

方々の島の頂上に標旗立て
測量隊はひもねすせわし
山志多

側角の守りとなりて銘剣で
石ころ山の上下あふなし
山志多

腕のさへ遺場に困る
奥つき　靜海



陽は紅に勇士の頬に輝けり
一日鉢巻のこゝろ微笑む
紀佐久

塹壕の中より首を支那兵の
恐るゝの顔中一面笑しき
紀佐久

振り上げた斧が物言ふジャンク狩
靜海

気違ひに武器を與へて射たれ損
（英国）

婦人でキンタマにぎる射撃前
靜海

燒鳥は上口むきなり蔵（関）東煮
（なゝき）

鎧を纏った駿逐艦

廣東の一日　堂・坊

一廣東や汗と油のしぼり水
一容態や何時迄續く廣東の
　空は晴れたり曇ったり
一非常時や何時去るか吉しの
　金巾男りに菊乃嘆く迄
一煙草ぼん功話しや宮金に
　勲○等よと大笑ひかな
一對鎖隊今日も毎日波ばかり
　何時来る大任の日は

（終）

山吉生

早苗陸戰隊!!
陸戰隊
向ふ所に
敵はなし

RN生

一スコールを待ちし裸や口あんぐり
一移動物固縛されたまゝ四月過ぎ

凸山生（三首）

一休養地凱旋勇士の気分出し　無名氏
一勝ち果て南支の別れ又淋し　同右
一吃子尾に別れし惜む二日酔　同右
一もの知りが語る日英支のカラクリ語　無名氏
一初警備神経を刺激する伍竹銃　無名氏
一握り飯たべたゝばかり
　捕虜になり

（無名）

神掛けて胡桃を私の誠心は
生きて帰らじ
祖国のために　読人不知

一針に眞心こめて
結びしは　武運祈リシ
銃後の娘達　二等兵

戰線に御後感輝く
軍艦旗　K生
敵地にてかりねの
夢の砂まくら　K生

慰問袋

文通を
始めておどろく
五十歳　我肉料　RN生

慰問品名前次第で
書く礼状　読人不知

弾丸よりに武運祈リシ
父母の愛
一死奉国吾は誓はん　二等兵

早甫陸戰隊夜營

腹かへり
初めて
知る芋の
味
RN生

艦隊の鎧を纏った

空爆にアキユ アカンと
阿呆(アホウ)顔

「○○砲撃」

一、平和を好む我国の
隠忍自重今は無駄
重なる暴戾耐へ難く
あゝ眠る獅子今や起つ
見よ、正義の行く處
邪雲は沈み安消ゆ

紀佐久作

二、連なる支那の大陸に
砲口不気味に睥睨す
砲火は遂に切られたり
あ我が腕を今ぞ知れ
見よ火を吐く砲口の
一発既に敵を呑む

三、敵兵遂に砲を捨て
逃げ行く姿あはれなり
巨弾は命中又命中
あ優れたる我が勇士
見よ蒙々たる黒煙を
次第車遂に爆破せり。

四、跡方もなく消へ失せし
敵の山上空高く
風になびくは軍艦旗
へんぽんとして翻るかへる
聞け陸戦隊の萬歳を
敵陣一正に占領せり

五、落ち行く夕日紅に
勇士の頬に輝けり
赤銅色の真顔に
見よ眞実なる録巻を
にこり微笑む我が勇士

ロスケ奴が
まぼろしの印
見えざるや

(終)

連日の猛砲を打ちこめて
敵のトーチカ吹き飛ばしけり

Y生

○○山敵の山砲分り蓄し

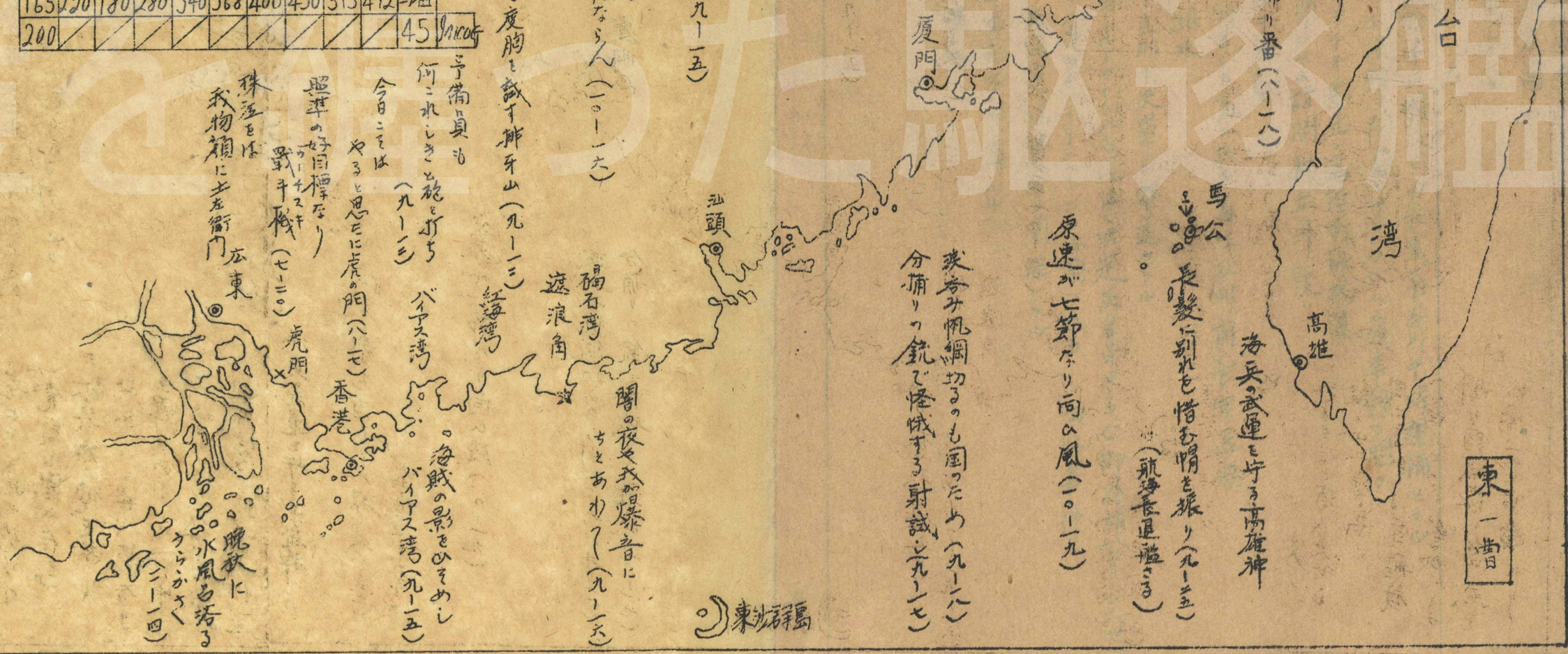
K生

無名の士

鎧を纏った報道班

驅逐艦早苗の足跡

	馬公	高雄	厦門	汕頭	碣石	紅海	バイヤス	香港	広東	牛角	馬祖	Incag
馬公	76	103	156	225	250	285	313	404	370	165	200	
高雄		177	212	258	282	315	342	422	400	220		
厦門			120	185	215	250	280	360	350	180		
汕頭				82	112	147	177	257	240	280		
碣石					30	65	95	175	160	340		
紅海						35	68	148	130	368		
バイヤス							30	110	95	400		
香港								85	73	430		
広東									115	515		
牛角										492		
馬祖											45	
Incag												



はるぐると来たが人形の神も見ず（八一二五）

日光巖閑無妙法の文字もあり（六一一三）

すは（泓）来ると勇めど とう（頭）く晴嶺来ず（九一一五）

遮浪角ではなく 製浪角ならん（一〇一一六）

腕前と度胸と誠す能牙山（九一一三）

予備員も 何これしきと砲を打ち（九一一三）

今日こそは やるぞと思ひたに虎の門（八一一七）

照準の好目標なり 戰手機（セーニ〇）

珠江をば 我物顔に上る衛門

印留は先ず同情を血祭りに 印留の上前はねる「ジャンク」あり

普行章 四本も同じ帰り番（八一一八）

海兵の武運を守る高雄神

長髪に別れを惜む帽を振り（九一一五）

（航海長退艦さる）

原速が七節なり向い風（一〇一一九）

波荒み帆綱切るのも困ったため（九一一八）

分捕りの銃で怪賊する射誠（九一一七）

闇の夜に大砲の爆音に ちとあわて（九一一六）

海賊の影をひそめし バイアス湾（九一一五）

晩秋に 水風吹落る ちらかさく（ニ一一四）

結城コレクション 駆逐艦

十二月

上旬　高雄方面
中旬　高公方面
下旬　同　右

総航程　四二四、四浬

今月ノ思出

一、　皇朝大異動海軍艦隊司令長官長谷川中將親補セラル
二、　エチオピヤ公使館ノ閉鎖ンアジスアベバニ領事館ヲ開ク
三、　青島ストライキ悪化ノ為陸戦隊揚陸
五、　朝日新聞シヤム訪問機立川發
六、　同右バンコック着
八、　長谷川長官青島ニ於テ着任及川前長官退艦
九、　鴨緑江結氷
一〇、　内蒙軍支那中央軍ニ撃退セラル
一一、　英国皇帝エドワード八世退位ニ決定英皇弟ヨーク公御踐祚（ジョージ六世）
一二、　エドワード八世ウインザー公トシテ佛国ヘ退去　西安事件、
日獨防共協定祝賀會開催セラル
一三、　蔣介石生死不明傳ハル
一四、　蔣介石健在

鎧を纏った駆逐艦

一月

総航程九五一八浬

上 旬 福州厦門方面

中 旬 同 右

下 旬 馬公方面

今月ノ思出

一 厦門ニテ越年

二 蔣介石卿里奉化ニ入ル艦四廣藝會

三 短艇競技

四 ペイン問題紛糾

八 陸軍始メ観兵式 二重橋前ニテ擧行

一三 獨逸宮殿ケーリング羅馬訪問

一四 王兆銘上海着

一七 獨逸軍艦エムデン第三世横浜入港

二三 廣田内閣総辞職

二八 上海事変五週年紀念日

二九 宇垣大將組閣ニ失敗 林大將ニ大命降下

三一 ヒ島大統領東京訪問

二月

総航程一一〇〇四浬

上 旬 高雄方面

中 旬 厦門汕頭方面

下 旬 汕頭福州方面

一、林内閣成立、青軍清掃事件（ピヤタコフ以下十三名銃殺）
二、聯合艦隊司令長官永野大將就任
一一、紀元節、文化勲章制定
一五、馳逐艦早苗進水紀念日
一七、張學良特赦
一九、支那新生活運動三周年紀念日
二〇、上海紡績再ビストライキ
二七、滿州國帝位継承法裁可

三月

上旬 福州方面
中旬 馬公方面
下旬 高雄方面

総航程 七八五、一浬

今月ノ思ヒ出

一、滿州国建国五周年
二、平緩線南口驛邦人不法調査事件
八、軍艦嵯峨廣東ニ於テ支那汽船ニ衝突セラル
一一、山東省海岸漁船抑留事件
一三、スペイン内国ニ依リ監視セラル、再ビ南口駅邦人不法調査事件發生、
一四、五個條御誓文奉戴七十週年紀念日、香港英海軍演習始マル、
一七、經清視察團南京、上海方面訪問
一八、秩父宮同妃殿下横浜御出帆

鉛筆で記入した部分は逐次消去

二一、 春季皇靈祭、香港英海軍大演習終了
二二、 教練射撃運轉工作運動應急、 吳鐵城廣東省主席就任
二三、 出雲南京ニ入港
三〇、 聯合艦隊青島ニ向フ
三一、 衆議院解散

四月

上旬 沙頭厦門方面
中旬 厦門馬公方面
下旬 馬公基隆方面

総延 一二八三、六浬

今月ノ思出

一、 米内百武中將大將ニ親任 厦門ニペスト発生
三、 足柄載冠式參列ノ爲横須賀発
六、 秩父宮殿下ニューヨーク御着 大角特命檢閲使青島発
九、 朝日新聞社訪歐機神風立川発
一二、 神風ロンドン着(九十四時間)
一六、 秩父宮殿下英國御着
二三、 大角大將漢口着(駆逐艦梅)
二四、 特命檢閲(於馬公) 檢閲使大角岑生大將
二六、 呆港灣大吊橋竣工
二九、 天長節
三〇、 衆議院総選挙 早苗神社祭典

五月

総航程三四〇九浬
上旬 汕頭馬公方面
中旬 馬公方面
下旬 同 石

今月ノ思出

一、廣東梅縣間鉄道擘設（英国資本ニ依ルト）風評アリ、
二、総選挙終了ス
六、ドイツ飛行船「ヒンデンブルグ」号ノ爆発
一〇、足柄ボートマス着
一二、英国戴冠式
一六、山東税警団邦人ニ暴行ヲ加フ
一九、英帝国会議開催
二〇、英国観艦式施行 帝国軍艦足柄参加
二一、神風東京着
二二、汕頭青山巡査事件
二三、勃海湾漁船拿捕撃沈事件
二六、海軍三等兵曹宮本敬林 死亡（馬公海軍病院）
二七、海軍記念日（馬公祝賀）
二九、ドイツ「ヒンデンブルグ」号爆撃事件
三一、林内閣総辞職
本月中二十日間入渠（五月九日乃至二十九日）

鎖を繋ぐ駆逐艦

六月

—上 —中 —下

—続 航程 八〇、八、一浬

旬 馬公出発厦門ノ南

旬 厦門香港方面

旬 廣東方面

今月ノ思出

二、近衛文麿ニ大命降下　天津聖農園事件

三、ウインザー公シンプソン夫人ト結婚

一二、ソ聯トハチェフスキー元帥以下八巨頭銃殺サル

一九、ソ聯軍ノ不法越境　本艦廣東着

二三、上海停戦協定委員會開催、ソビエト浮船ドック浦塩ヘノ途中香港着

三〇、ソ聯砲艦三艘日満軍ニ発砲　二艘ニ大破損ヲ施フ

七月

—続 航程 一 五八、一浬

—上中下旬 廣東方面

今月ノ思出

一、ソビエト砲艦五艘乾金子島附近ニ再ビ不法浸入、本艦香港着

三、ソ兵国境附近ヨリ撤退　軍艦足柄香港着

五、米国独立祭満艦飾施行　軍艦足柄、本艦、香港着

七、北支事変突発（午后十一時四十分）

一一、北支派兵上奏裁可田代司令官ニ代リ香月清司中將親補サル

一二、支那軍中合セヲ蹂躙シ盧溝橋北方ニ進出射撃ス

一五、内地ヨリ派兵決定　地方長官會議　中央軍北上セルモノ三十個師ニ及ブ

一六、前支那駐屯軍司令官田代中將逝去

復刻 艦隊 艦隊

一七 五相會議ノ結果支那ニ最后的態度ヲ表示ス

一九 我重大通告ニ對シ支那ノ友誼的ナル不孫極マル回答ヲ覺書ヲ提出ス

二〇 日高・王南京ニ會見ス 支那ノ友誼的ナル不孫態度ヲ示ス

二一 齋藤外相許支那大使ニ対シ猛省ヲ促ス 廿九軍ノ一部撤退開始

二四 四川路ニテ我上海陸戰隊宮崎一等水兵何者カニ拉致サル

二五 郎坊駐北方ノ支那軍ノ電話線修理中ノ我部隊ニ不法射撃ス

二六 香月司令官宋哲元ニ対シ最后的通牒ヲ発ス

二七 政府ハ断乎自衛行動ニ出ル旨ノ重大聲明ヲ発ス

二八 自衛權ノ発動開始

二九 通州叛亂事件 太沽砲撃（海軍最初ノ行動ノ開始ス）

三〇 太沽占領 長辛店占領 通州叛亂隊ノ一部武裝解除

三一 天津市内ノ掃蕩終了シ全ノ平定ス

八月

統帥 一一六、五 浬

上 旬 廣東方面

中 旬 同 右

下 旬 馬公馬祖島間江口方面

今月ノ思出

一 天津治安維持會ノ成立 北苑占領

二 臨時增稅暴利取締令ガ発表セラル

三 本日迄皇軍戰死者三百六十四名戰傷者八百六十九名

六 冀東政權委員長代理張自忠辞職 冀察政權ハ之ニ依リ解消

七、漢口民留邦人安陽丸ニテ総引揚、九江蕪湖モ全部引揚完了
八、北平入城　冀東政府ハ池宗皇上長官代理ニ依リ唐山ニ臨時政府ヲ設ケ
九、上海大山事件　長江筋ノ邦人三千百名上海迄引揚完了
一〇、大山事件真相捜査行ハル
一二、沙頭領事館員ヲ除キ引揚完了　廣東ニテハ婦女子八十名引揚　残三百名
一三、黄浦江ノ我艦隊迄ニ沈黙ヲ破ル
一四、青島水兵射殺事件　我空軍第一回空爆敢行
一五、第二回空爆敢行（杭州　南昌　南京）
一六、嘉興　虹橋　南京　句容　南昌ヲ爆撃　浦東方面砲撃
一七、蚌埠　淮陰海等ヲ爆撃　廣東引揚完了
一八、南京飛行場　龍華飛行場ヲ爆撃
一九、南京火薬廠及謀本部ヲ爆撃
二一、敵タンクヲ取ル　壮烈肉弾飛行機ノ激闘
二三、我陸軍敵前上陸敢行
二五、帝国海軍沿海封鎖ヲ宣言　揚家宅占領
二六、南昌飛行場襲撃　支那軍艦　日（五〇〇屯）撃沈
二七、南京西廿所爆撃　康壮、延慶占領
二八、南停車場、浦東ヲ爆撃　殷行鉄羅店鎮占領
二九、支不可侵條約成立　厦門不穏トナリ長沙丸ニテ引揚完了
三一、呉淞砲台占領　廣東、福建地方ヲ空襲

九月

上旬 中旬 下旬

統帥 航程 一八八五、四浬

南支沿岸航行遮斷

今月ノ思出

一、獅子林砲台ヲ占領ス
二、真茅無電台ヲ爆撃　吳淞砲台ヲ完全ニ占領
三、帝国駆逐艦厦門ニ猛攻撃　東沙島占領
四、沙尾嶋宮ノ砲撃　青島民留民引揚完了　帝国議会開院式
五、金支海峡ヲ封鎖ニ決ス
六、我水上機厦門沙頭ヲ爆撃　廣東珠江口ノ赤湾砲台空中爆撃
城ベイアス湾ニ砲撃ヲ加フ
七、厦門ヲ再ビ空襲　杭州廣德ノ航空基地爆撃
八、第七十二回議会開院式　我軍艦沙頭港外ヨリ砲台及飛行場ヲ砲撃
九、二回ニ亘リ沙頭ヲ爆撃　江南飛行機製造廠爆撃
一〇、我駆逐艦ベイアス湾牌牙山砲台及廣東海軍無電台ヲ砲撃
一一、虎門砲台ヲ砲撃　我軍艦萬山郡島付近ニテ敵機二機ニ襲ハル
一二、軍艦〇〇〇〇駆逐隊ト虎門砲台ヲ砲撃　巡洋艦二艘シ開坐セシム
一三、我軍艦再ビ沙頭砲撃ス　沙頭港外ニテ〇〇駆逐艦五回ニ亘リ二十四発ノ爆撃ヲ受ク
一七、黄海ノ戦紀念日

鎖港の為の駆逐艦

一八、 福州事変記念日
二二、 江蔭在泊敵艦四艘ヲ大破ス
二三、 第三艦隊司令伏見宮博義王殿下御負傷 田中少尉退職
二九、 江蔭ヲ襲ヒ巡洋艦一隻ヲ大傾斜セシム
三〇、 英浦西方ヲ巡洋艦ヲ爆撃砲艦一ヲ爆沈ス 大関大尉着任

十月

○総航程 一二五七九哩
上中下旬 南支沿岸航行態勢

今月ノ思出

一、 江蔭方面ニテ敵砲艦一ヲ爆沈砲艦一ヲ閉塞セシム
二、 江蔭方面ニテ巡洋艦一砲艦三ヲ爆撃大破ス
三、 東安豊占領、徳州入城
四、 上海崇徳、如皋校ノ陸陣ヲ占領
五、 三義項部落占領
六、 海軍戦闘南京ノ盗賊ヲシテ逃リ敵機二十三機ヲ屠ル
一一、 井陘ヲ占領、趙州元氏占領
一四、 上海街占領、護衛戦歩城ヲ占領、内邱占領
一五、 順慶ヲ占領
一七、 包頭ヲ占領、邯鄲ヲ領
一八、 徐州ヲ占領

(終)

末尾に

○多忙中暇を盗んで當つた爲不完全な点が多くあり順序もなつてゐないが悪しからず御許しを乞ふ

○一ケ年起居を共にした早苗の思い出が多少とも本書に滲み出れば望外の幸ひである

○事變の前途猶暫遠なるものあり吳々も諸君の御自愛御奮闘を祈る

○一年の歴史の容顔は各自の思い出を書いてもらいたい

編輯謄寫責任者
海軍中尉 尾崎隆
同右補佐
海軍兵水兵 川口正人
海軍兵 松本新太郎

（完）

艦船模型 鎧を纏った駆逐艦